



1979年(昭和54年)

4月号(No. 406)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

厳冬期霞沢岳三本槍登攀

—昭和15年2月11日—

- (中村徳郎)……………(1)
- ウェストンさんの手紙
(成瀬岩雄)……………(2)
- 花の徳本峠みち(坂倉登喜子)……………(4)
- 東西南北……………(4)
- 図書紹介……………(6)
- ブラヴァンド氏の山案内手帳(5)
(岡沢祐吉)……………(6)

お知らせ

- 第17回 木暮翁碑前懇親会……………(8)
- 第379回 小集会御在所岳藤内壁……………(8)
- 山菜山行……………(9)
- 第34回 ウェストン祭と記念山行……………(5)
- 会務報告・ルーム日誌・全員動向……………(9)
- 図書受入報告……………(10)
- カット/梅谷隆一

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

厳冬期霞沢岳三本槍登攀

昭和十五年二月十一日

中村 徳郎

まえがき

本文の筆者故中村徳郎は大正七年生れで、旧第一高等学校旅行部に属し、純粹なアルピニズムを目指して止まなかった山キチの一人である。本会の会報118号(昭和十七年七月・八月合併号)にも寄稿しているが、夏休みなどは上高地に滞在しつづけてガイドをつとめ、昭和十四年、日独交換学生であったカール・ピルス君が穂高の岩場で瀕死の重傷を負った時など、夜を徹して救出したこともある。冬にも上高地に入り、当時積雪期登山の実力を高く評価されていた故上条孫人(嘉門治の孫)と組み槍や穂高に挑んだ。この手記は皇

紀二千六百年の紀元節を期して孫人と二人で霞沢岳三本槍の冬期初登攀を試み、これを踏破した記録で、同年二月十七日付東京朝日新聞夕刊に掲載された記事の再録である。

彼は、第六次エベレスト遠征に参加の後来日し、一高の講師をしていたジョン・モリスや、東大理学部の下村太郎教授に私淑し、氷河学者としての成長も図ったが、大学入学の年、学徒動員で召集され、昭和十九年比島で戦死した。戦没学生の手記「はるかなる山河に」(東大出版)には二十数頁にわたって彼の隊中日記が収録されており、一四四ページには自己の最も思

い出深い山行として三本槍行の追憶も綴られている。また外地出征が決った日の項(一五二ページ)には「私は南極の氷の中か、ヒマラヤの水壁か、トルキスタンの沙漠に埋もれて生涯を閉じたかったが、運命の神は幸しませんでした」と記されている。その後昭和三十四年、第三次南極観測に私が参加して越冬した時には、遙かに南極大陸を望むオングル島の丘の上に村山雅美隊長と二人で彼を偲ぶケルンを積み上げ、中に積雪期の穂高を背景にした彼の遺影を納めてその冥福を祈った次第である。(中村純二)

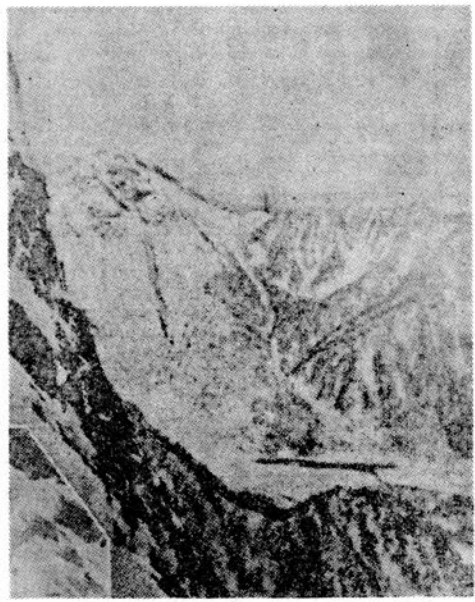
き出された三本の鋸齒状をした一群の岩峰に対し、何かしら心惹かれるものを感じるであろう。これが即ち「三本槍」である。紀元節の佳き日を我々は雪深く閉ざされた、而も他に誰も人として居ない上高地の谷に迎えた。はつきりしない天候に気を揉み乍らも漸くの事で天候と雪崩の見通しをつけ、登高を決意して出発したのは彼之十一時に近かった。前々日までは吹雪で、前日は零下二十四度という低気温とともに快晴、且強風が吹いた。この日は零下七度、薄曇であった。シルを使つて上高地ホテル裏の大きな沢を一直線にぐんぐん登る。

夏や秋はガラガラしているこの沢も全く雪に埋もれて上高地随一のスキー練習場かと云える広大な

雪原だ。登るに従つて次第に傾斜を増す。真正面におおい被さる様に聳える坊主頭の如き岩峰が愈々我々に迫る。この岩峰の直下の沢は二股に分れるが、その右股を溯ると霞沢岳の頂に達する。此の分岐点まであと十分足らずと思われる所で、左の方から一際急な細い沢が落ち合っている。我々はこの沢へ入った。

既に数多くのキックタインが繰返されている。雪は割合に締つていてラッセルするには比較的楽だが、タインする時には余程バランスに気をつけないと危い。この付近は雪さえ無ければ大小様々の滝の連続で、頭から水を浴びて登る様な所だ。如何に傾斜が急であるかが解ると思う。その大きな滝も全部雪を被つて真直一本の雪の樋の様である。これ程雪崩の危険のある所はない。分岐した小さな沢が二十幾つか有るといふ。その全部がこの真中の沢に押出して来るし、来ればもう絶対絶命逃れる術とてない。登りながらも恐らく七日頃に出たと推定される雪崩のあとが幾つもあって思わずその光景を想像して身の縮む思いがした。下の入口から数えて二ツ目の大滝の下部付近をスキーデポと定める。もう午後一時に近い。乾バ

山をきれいに「ミ」は持ち帰る



三本槍中央峰（左側の黒い峰）から焼岳を望む
（下に黒く横たわるのは大正池の一部）

ンとチーズと紅茶で第一回の昼食、食べながらも絶えず足踏みと柏手である。ちっとしていると全身凍えそう。幸いに風は甚だ弱い。愈々ワカンに穿き替え、防寒を一層厳重にして、益々急になり且細くなった沢を、這うように又攀じるように直登行を続ける。

ワカンは厭という程落込む。手先や鼻先はびりびりする程痛い。背中中はルックに滲む程の汗である。行手に当って岩場が見えて来る。ラッセルは堪えられぬ程苦しい。いくら行ってもなかなか進まない。そろそろ風が強くなる。睫毛が凍りついて時々目が見えなくなる。漸くの事で岩壁の直下に辿りつき、其処で更にアイゼンに穿き替えた。

二人は互にザイルで結ぶ。愈々氷と雪と岩への挑戦である。夏は

此の付近は凄いのアンサウンドロックで而も逆層であるので極めて悪い所だが、今は更にそれより悪い。岩塊が凍結しているとは云うものの一々テストした上でなければ掴めない。時々馬鹿に雪の深い所があって首まで落ち込んで驚く事もある。

先刻登って来た沢を分って幾つもの尾根（壁のように急に落ちていくのだが）が出ていく。その中、三本槍の左のピークから垂れている尾根の末端に取付いて攀じ登る。軍手一枚ではあるが手先は案外冷たさを感じない。動かすからである。

四時五分、遂に感激の登頂。中央ピークに立って四周を見渡す。何と美しい眺めであろう。明神、前穂、奥穂、ジャン、西穂、焼、笠、抜戸、甲斐駒、仙丈、白峰、

八ツ等々、総て一望の裡にある。而も趣が又新しい。

名残を惜みつつ下りにつく。一歩一歩慎重を極めて同じ跡を辿る。ワカンのある処へ来てホッとした。置き残したルックの中からバタピーナツを出して無暗に頼張る。もう五時半だ。ザイルの始末をしてワカンで下る。足許から泡の様に雪が崩れてゆく。スキーを穿いてからの真暗の中を気が遠くなる程飛ばした。限らない感激に身を包んで……。常さんが「よくやった」と心配顔を綻ばせて迎えて呉れた。それが又堪らない程嬉しかった。

夏ですら霞沢・六百へ登る人は



三本槍直下の絶壁を登る上条孫人氏

「数週間前に御親切な御手紙が届きました。大変嬉しうございまして。一年間の軍隊訓練が貴方にと

ウェストンさんの手紙

成瀬岩雄

達、この山の頂にも寝転び、コケモモの実を摘みながら山の讃歌を高らかに唄いつつ、今日ある我が「山」を開拓して行ったのである。今茲に改めて此等の山々を歴史的に再認識したいと思う。

【二六〇〇・二・十五】 タイム概略次の如し。

ホテル発（二〇・五〇）一分岐点（〇・一七）スキーデポ（〇・五〇）一・二〇）ワカンのデポ（二・一七）二・四〇）頂上（四・〇五）頂上発（四・二〇）デポ（五・一五）五・二五）下のデポ（五・四〇）五・五〇）ホテル着（六・三五）

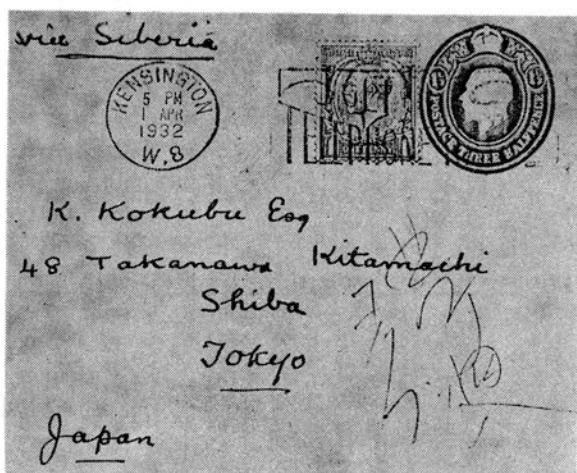
極めて少い。この山が人々に忘れられていたのは洵に惜しい。眺望の良い事は断然推奨に値する。小島島水先生が初めて上高地を訪れて以来、上高地周辺を熱愛した先人

いる必要がないことを祈ります。

慶応義塾の雑誌を送って下さってまことにありがとうございます。「山岳」やその他の日本の登山に関する刊行物が記事の標題とか、写真の名前説明など、若干の説明を英語で載せることが出来たらよいのに、と常に思っております。そして英の友人や登山仲間、日本の仲間が何をしているかを知らせることになりましょう。現在のところ日本の山岳雑誌はその記事が何であるか英国人には見当をつけさせることが出来ませんし、従って日本の登山家は其の業績に対して何等認められないのです。また、日本の山岳地帯の主たる興味を構成するものはなんであるかを英語を通じて知ることが出来ないのです。

日本が最近二、三カ月、中国との間に紛争を起しつつあることをお気の毒に思います。中国人は欧米での宣伝に当って手段を選びません。そして多くの人を誤解に導きます。

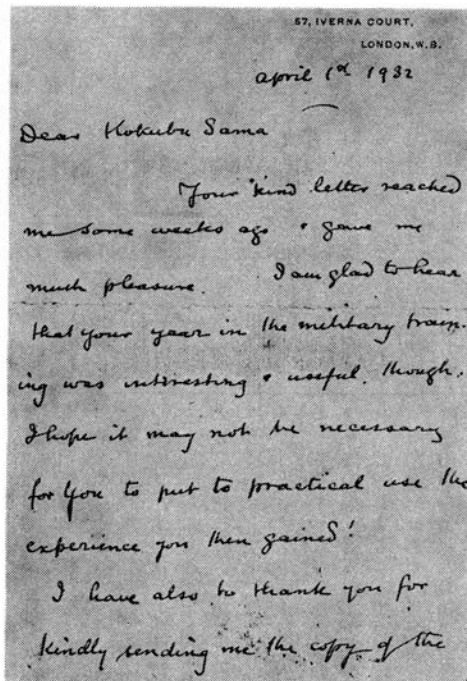
私は英国が今日、ジョン・サイモンのような頭脳明晰な良外務大臣を持てていることを欣びます。彼はたやすく誤解に引きずられるような人物ではありませんし、日本にとって良き友人であると思えます。私は共通の友人をへてサイモン卿にこの問題について何かチョット有用だったと思う事柄を告げることが出来ました。上海、満洲に関する現在の紛争が近く公



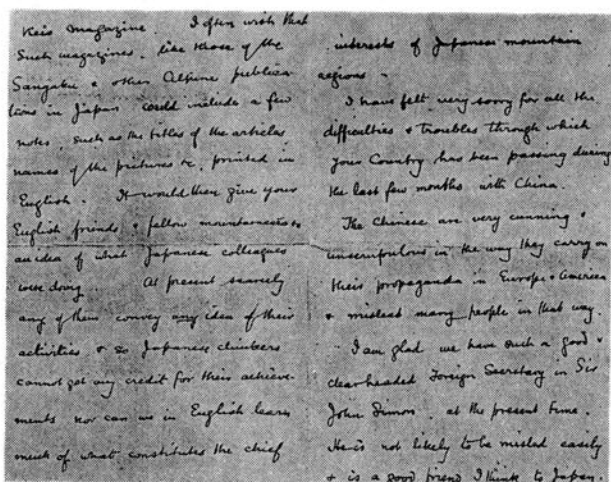
＜ウォルター・ウェストンの手紙＞

ロンドン W8, ケンジントン, 1932年4月1日午後5時の消印とシベリア経由便の自筆の指示がある封筒と文面

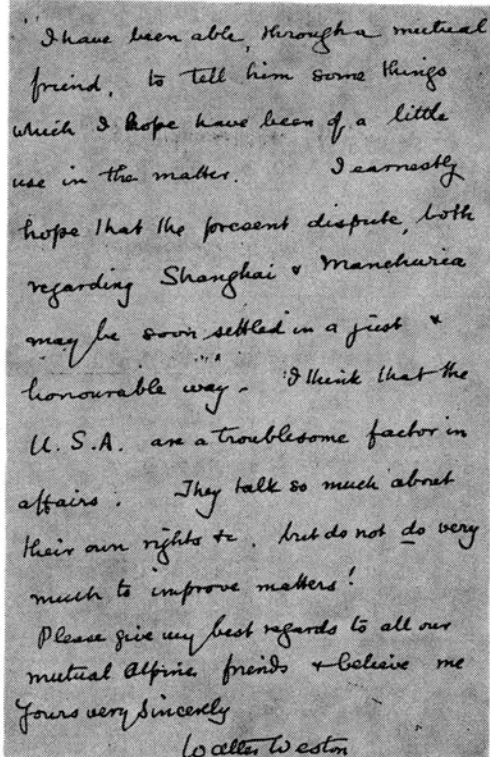
①



②



③



この書翰を快く披露せられた国分勘兵衛君は慶応大学山岳部出身の大先輩であり、昭和六年に同校卒業後、ただちにヨーロッパ山

正な、名譽を傷つけない方法で解決されることを熱望します。アメリカは厄介な国だと思ひます。自分の權利ばかり大いに論じますが事態を好転させるために行動に出ることはあまりしません。私の共通の登山家友人の方々、皆さんによりしくお伝え下さい。敬具

右は一九三二年四月一日附でウェストンさんが本会会員の国分勘兵衛君に寄せられた書翰の全文であるが、時、あたかも支那事變の起きた当時のことであり、晩年まで日本のために陰ながらよき協力者として努力をつづけられ、ロンドンに帰られても英国内各地を廻つて日本に対する誤解を是正するよう、講演をされたということ

は、かねてから、聞き及んでいたことではあるが、この書翰によってもますますはつきり判ると思ふ。また、常に日本の山や山友達のことも念頭を去らず、わが日本山岳会創立の親たるウェストンさんのこの書翰は、今にして見ればまことに貴重なるものであり、日本山岳会会史の重要な逸品でもあると思う。

群、ベルナーオーバーラント、またスピッツベルゲン等に山登りを楽しみ、松方三郎さんの紹介によりウェストンさんを訪ねて以来同師には特に親しまれ、しばしば会談を共にされた由である。

また、同君は一九二四年、英国のエベレスト登山隊が撮った十六ミリの映画が当時一般に売出されたのを逸早く入手、永らく今日まで保管されていたのであるが、たまたま一九七三年、ダーズリンで行なわれたインターナショナル・マウンテニアリング・クラブの会合において三田前会長が出席、披露したところ、同じく同会に出席していたハント隊長より「今は英

花の徳本峠みち

ニセアカシヤの香りただよう島島宿を出発したのは、鶯の声に目覚めた島々の宿、石川旅館を後にした昨年六月三日午前四時半だった。

東沢出合からやとアブローチの車道が終り、緑蔭の谷道に入ると、自然の中に踏み入った感じがした。まだ太陽の光がさしこまない樹林の間では、朝の冷気が肌に心良い。

少し歩き出すと、道辺りに白い四弁花のしおらしいミヤマカタバミが、まず目に触れた。緑したた

本国にもない貴重なフィルムであり、出来れば寄贈願いたき」旨の申し出あり、所有者の国分勘兵衛君の快諾により英国山岳会に寄贈されることになり、一昨年、一九七七年六月十八日に、在日英国大使ウィルフォード氏に麴町三番町の同大使館に於て三田前会長を通じて贈与されたような次第で、国分勘兵衛君は本会に対しても会員として陰ながら援助を惜しまない熱心なる会員であり、今回もまたこのウェストン師よりの秘蔵の書翰を被露してくださった好意に對し、ここに本会として感謝、御礼を申し上げたいと思うのである。

一、二〇、一九七九

坂倉登喜子

るばかりの谷すじの下萌えには、クルマバヤグルマソウ、ノビネチドリ、ラショウモンカタツラ、アオチドリ、ズタヤクシ、イチヨウラン、カモメラン、ツバメオモトなどが次々に私たちの眼を楽しませる。ひとつ、ひとつ、名前を聞かれて、次々に思い出しながら歩いていくうちに、岩魚止小屋に着いた。朝の静かなあまのり端に招じ入れられて、約一時間ほど休み出発した。

昨年は何時もより花が多く、小屋付近では珍しいヤマシヤクヤ



九山と俳句

深田久弥は昭和二十二年九月から同二十六年三月まで、ふるさと大聖寺町に三年半住んだ。その間におこした会に山の方では錦城山岳会があり、俳句ではつしほ句会がある。句会では例会のほかに、特別に、芭蕉が奥の細道の旅上に立寄った全昌寺が同町にあるので秋には芭蕉忌を修し、句会を催している。九山夫妻は金沢へ転居されても、その後東京へ移居されても必ずこの芭蕉忌に参ぜられ、句をものされ、あとは賑かに我々と談笑されるのが常でした。昭和四十六年三月二十一日茅ヶ岳でなくなられたあとと志げ子夫人が参ぜられた。そして九山永眠の日を記念して、九山忌を修し、我々は句会をこの全昌寺で毎春催している。この二つの句会には大聖寺町内の会員は勿論のこと金沢から能登から、越中から、そして福井、三国からも句友の参加をみている。昭和五十三年

三月に九山句集が志げ子夫人の手で刊行されたのである。これには九山の句三七〇句と、俳句に関する随筆、俳句履歴書十篇、北国歳時記十一篇その他四篇が収められて九山と俳句との関係がよくわかるようになっていく。

この秋で、はつしほ句会が誕生して三十年になるというので我々は句集(第三輯)を刊行した。これには選者になってもらった九山をはじめ、高野素十、伊藤柏翠ら十四人の句、会員のものは故人を含めて三十七人、それに会友十六人計六十七人計一三四〇句が収められている。九山夫妻を中心の写真十九枚ものせられ、最後に「はつしほの歩みを語る会」の記事十二頁があり今日までの会の足跡も語られている。ふるさとの山河と人いかに九山夫妻が深い愛情を寄せていたかを思うこの頃である。(山下久男・53・12・18記)

スキー集會

(第三七七回小集會)

去る一月十三日(土)一十五日(月)に白馬山麓岩岳スキー場で開催された。

今年は例年になく各地ともスキー場は雪不足をかこつて、あるいは快適な滑降は望まれないのではないかと懸念されていた

が、スキーもさることながらペンション貸切りで懇親会という集會委員の企画に大きな期待をかけて参加した。

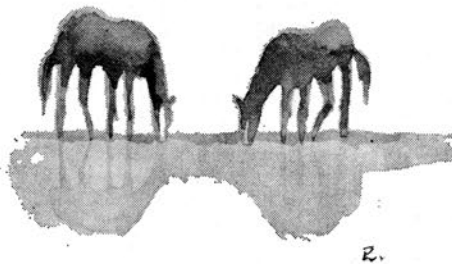
十三日午後、白馬駅から指定された「旅人ペンション」に迎えに来てくれた車が入った。このペンションは中沢光江委員知人の経営で、若い夫妻の何気ない心のこもったサービスが気持ちよかつた。

先着の何人かは既にスキー場へ行っている聞いたので、同行の山口さん等と後を追って、リフトを乗りついで岩岳頂上まで登ったが、展望の良いはずの白馬連峰も相憎とその姿を現わしてくれなかつた。スキーコースは各処に草付きや岩石の露出もあつたが、どうにか無事に初日の滑降を終った。随分と脛の筋肉が疲れた。藤井さんも筋肉痛が一時ひどく一日繰上げて帰京されたが、我々年代ともなれば矢張り無理がきかないので、精々若い会員の御世話でスキーを愉しませてもらったというのが実感である。十三日夜からの雪で翌日は快適なコンディションとなり、スキーも充分愉しむことが出来たが、各種のスキー競争と夜のパーティーに家族、友人を混えた楽しい二泊を過ごさせてもらつて幸いであつた。参加者のうちでは最長老のアミ

東 西 南 北

クのつぼみを見ることができた。幾度も峠を越えているのに、この年始めて見られたのは、開花期に多少のずれがあったからだろう。サンカヨウの花も昨年はいくつもより大きく立派にたくさん咲いていたように思えた。

やがてイチリンソウの群産する湿地を過ぎて、道はやや登りぎみに高度をあげると、木々の芽吹きがまだ早春のけはい。オオカメノ



キが白い花を樹間に見せていた。最後のジグザグを登り始めると、峠近くで残雪を踏むようになり、やっとお昼ごろ頂上に着く。峠直下で信濃支部の百瀬一茂さんが後から追いついてこられ、峠の小屋で一緒に昼食をした。去年小屋主が亡くなられたので、奥さんが挨拶に出てこられ、雰囲気が変わったようだった。

小屋の前で後発の人たちを待っている、上高地側から一人で登ってこられた片岡博さんに会い、程なく宇津さんがお友だちと二人で、大型のカメラを携えて登って見えたのでびっくりした。

やがて三時半ごろエーデルワイス・クラブの人たちが登りつき、感激の対面をし、穂高をバックに記念撮影をした。

昨年は新ハイキング・クラブの会員も三十名初参加され、峠の上は超満員、小屋で泊る皆さんと別れて私たちは北側の道へ四時ごろ出発した。雪が多く、反対側の植物は小さく芽生えたばかりだったが、降るにつれてイワカガミ、サンカヨウ、イチリンソウなどが咲き競っていた。宇津さんの八ミリカメラのモデルになりながら一気に河原状の所まで下り一休み、そこにはハクサンハタザオの白い花が夕風に揺れていた。

上高地への道が合するあたりでシャクナゲの群落が右側の斜面にあって一同歓声をあげる。

いつに変わらぬ梓の流れを前景に明神岳がのしかかり、ケシウヤナギの緑が川辺にひろがるプロムナードを上高地へ歩く。

やっと夕餉の煙の立ちのぼる小梨平のキャンプ場についたのは六時半ごろ、予定よりおくれで西糸屋へ、直行でこられた歌の指導者平野先生、信濃支部の高山さん、新ハイの見沢さん等に迎えられ、

さんこと網蔵さんは、口も達者だが、スキーもあの身体に似つかず軽く達者なところを見せていた。高橋さんの息子さんもあと一、二年でオヤジも追い越されそうだし、若々しい早川瑠璃子さんにあんな大きなお嬢さんがと改めて私自身も忘れていた年令をいままらのように考えさせられた。

静かに降り出した雪に、これからの冬山スキーシーズンを想い、時のたつのを忘れ、大いに飲み喰いすべって、十五日はまたそれぞれに帰途についた。いつもながら集会委員の配慮に感謝の意を表す。

(参加者) 山口一孝、吉田実、沢井政信、小松原一郎、入沢郁夫、久保孝一郎、藤井運平、森谷虎彦、村井葵、サイナー、同

また信濃支部の皆さんにお会いできたことをお互に喜び合った。

ウェストン祭も三十二回目を迎えた、古顔の諸先生のお姿が見られないのは淋しい限りだが、日本山岳会会長を始め、榎有恒氏、折井副会長、佐藤氏、沼倉氏等がご出席になられた。当日雨が降り係の皆さんもさぞご苦労だったと思われる。私たちは記念山行とウェストン祭に参加することに意義があると、毎年参加しているが、全国のJAC会員も本年はぜひご参加を。

夫人、吉田方洋、石川政弘、同夫人、岡健治郎、川北仁、斎藤桂、網蔵志朗、折井健一、高橋聡、同子息、小村井伶子、土田誠、今村千秋、早川瑠璃子、早川理奈子、中川武、小川歩、同夫人、河村憲二、村木富士、中沢光江、池田智津子、塚原道夫、小原俊 (折井健一)

第45回三水会現地集会

不動ノ湯、比企笠山

一月二十日、二十一日の両日秩父七湯の一つ不動ノ湯を起点に比企笠山をへて小川町に下り、名物忠七めしを味わうという、湯浴み、登頂、味をかねそなえたバラエティある山行となった。

不動ノ湯は、古くから秩父、奥武蔵の山々を愛好して探索さ

れた先輩岳人の基地として利用された由、いまなお往時のよさを持ちつづけているところにひかれて案内役をつとめた坂倉(登)氏もその一人である。

定峰峠から白石、笠山への道は天候に恵まれて、武甲山、両神山をはじめ秩父、奥武蔵の山が眼前にくっきりとくりひろげられてゆく。途中、猪の足跡をみつけ、猪狩りの人々に会う。年長の浜田氏を囲む一行は思い思いのペースで木もれ日の中を歩きながら冬枯れの奥武蔵の雰囲気を感じた。参加者は、片岡、木村(俊)、大野、高田、岩堀と合流した女性三人、最終コースにかけつけた斎藤(健)を含めた十一人。(岩堀瑞子)

第三十三回

ウェストン祭と

記念山行

恒例のウェストン祭は今年も、来る六月二日(土)三日(日)に行われますが、毎年記念山行として現地信濃支部主催で、徳本峠越えコースの山行が全国からの参加者を迎えて、行われております。

昔日本アルプスを世界に紹介されたウェストン師が歩かれた道を辿り、徳本峠越えをして翌日上高地のウェストン祭に参加してこそ意義があります。

島々宿午前七時集合、岩魚止小屋で昼食、峠で穂高を仰ぎ、夕方までに上高地へ。翌三日梓河畔で、碑前祭と記念講演及びコーラスなどがあり、参加者には参加章が用意されます。



図書紹介

ヒマラヤ ——第三の極地

ディーレンフルト
福田宏年 訳

ヒマラヤ研究者として高名な著者G・O・ディーレンフルト(一八八六—一九七五)について、いまさら詳しい説明は不要であらう。同氏には一九五二年に『第三の極地へ』の著作があり、一九五六年諏訪多栄蔵、横川文雄氏によって訳出刊行されている。著者はその後、右の改訂増補版を企図したが初版の大部分を若干の修正と加筆だけで引き継ぐことの不可能であることに思い到り、その重点を一九五二年から一九六〇年の数年間におくことを考えた。即ち八千メートル峰の初登頂を中心とした登攀史を展開することとしたのである。それが、本書の原本『第三の極地』(一九六〇年刊)である。

既に多くのヒマラヤ研究者によって広く活用された本書が、現在まで邦訳されなかったことが、むしろ不思議なくらいだが、このたび会員福田宏年氏の好訳を得たことは、わが国のヒマラヤニストにとってまことに喜ばしい。

本訳書には原著の初登頂リストに、一九六一年以降七七年までの分が馬場勝嘉氏によって追加された山域図では薬師義美氏の、文献目録では諏訪多栄蔵、水野勉氏の協力がなされ、邦訳として完璧を期している点も親切である。

訳文中、米登山家のC・ハウストンがヒューストンとなっているほか、一、二気のつく点もないではないが、大きな瑕瑾とは言えない。

合判本文二六二ページ・附録九四ページ・写真一六ページ・地図・人名山名索引添附。一九七八年八月 白水社刊 定価三二〇〇円 (望月達夫)

立山町史 上巻

立山町編

『立山町史』上巻は、昭和五十二年、立山町から刊行された。

地形地質・郷土のあけぼの・古代の郷土・武將たちの足跡・中世の荘園・美術工芸・立山信仰の七章から成り、「付録」として立山縁起諸本六篇をそえている。

ブラヴァンド氏の

山案内人手帳 (5)

岡沢祐吉

浦松佐美太郎氏の記録

p. 103

Oct. 7, 1928

August. 12. Klein-v. Gross-Simeisstock
Traversierung nach Simelisattel.

14. Gspaltenhorn

nach Muthornhütte u. Gamschücke

15. Breithorn. (Lauterbrunnen)

19. Mönch Traversierung

von Guggihütte über Nollen. nach

Jungfraujoch.

20. Eiger. Traversierung.

von Jungfraujoch über Eigergioch. nach

Mittellegihütte über Mittellegigrat.

24. Wetterhorn. Traversierung.

Die Erste Besteigung des Westgrates.

[This was a great enterprise of Sami. We shall never forget every inch of that arete and especially that beautiful "Finale".]

Sami is a best mountain friend of mine. I have learned so much from him, not only the mountain craft but also many, many other things. Still more I am learning from him.

With many thanks and happy wishes.

Sanitaro Uramatsu

一九二八年十月七日
グリンデルヴァルト

八月十二日 クライン及びグロース・ズィムメルシュトック

ズィムメルザッテルへの縦走

八月十四日 グスパルテンホルン

ガムヒリユッケ經由ムットホルンヒュッテ

八月十五日 ブライトホルン(ラウターブルンネン)

八月十九日 メンヒの縦走グギヒュッテからノーレン經由ユングフラウヨッホへ

八月二十日 アイガーの縦走ユングフラウヨッホからアイガーヨッホ、ミッテルレギ尾根を経てミッテルレギヒュッテへ

八月二十四日 ヴェッターホルンの縦走西尾根の初登(これはザミの一大計画だった。僕らはあの尾根の「インチー」を忘れることは決してないし、特にあの美しい「ファイナール」を忘れることは決してないだろう)

ザミは私の最高の山友達の一人だ。彼からはたくさんのお話を教わった。登山技術だけでなく、もっといろいろの事だ。私はまだまだ彼から学びたい。

感謝と幸せを願って

浦松佐美太郎

八月十五日のブライトホルンは、前日グスパルテンホルンからムットホルンヒュッテに泊り、そこからチンゲルホルン南西稜鞍部を越え、ヴェッターリユッケに出てブライトホルン西稜にとりつく。ここからは北へシュマドリヨッホを経てシュマドリヒュッテへと降りるのが、グリンデルヴァルトへ戻るには最適のコース。グスパルテンホルンは南西のブリュムリスアルプ、ドルデンホルン、パルムホルン、ヴァルトシュトルベルなどとともに、日本では辻村伊助氏の他に現在まで、ほとんど目を向けられていない。グスパルテンホルンは一八六

立山町の町域は剣岳・立山から黒部峡谷下廊下を含み、さらに後立山の核心部鹿島槍・針木岳の西面にまで及ぶ。山岳関係者にとって特に関心をひかれるのは「立山信仰」の章であろう。頁数からいっても、二六〇頁、全巻の四分の一以上の労作である。「山霊の崇拜」「たち山をめぐって」「登拝信仰の成立」「開山縁起をめぐって」「山中他界観の成立」「里寺の成立」「立山修験の成立」「遍尊信仰」「立山僧徒の布教活動」「登拝慣行の成立」「立山参詣路の変遷」「維新前後の動揺」「近代登山の夜明け」「黒部奥山について」の十四節に分け、さらに細目を設けて、

微に入り細にわたって記述されているが、地元の、しかも宿坊関係者ならではの知れぬ史料を活用しての記述は貴重である。その記述中、従来の通説を打破した創見もある。例えば桑名光時が、「立山雄山宮」と彫った雄山神社の献額は、戦国時代のものでとされ、雄山神と立山権現を同一視した最古の史料として光時が江戸中期の人物であったことを立証した。

従来の諸家の研究を集大成し、多数の写真をちりばめての記述は立山信仰を知るためにまことに便利である。しかし「先行研究業績」に依存し、恩恵をこうむっておりながら紹介もなく言及もなかった(若干の例外はある)のは、誠に遺憾である」と、地もとの史学雑

誌『富山史壇』の書評(橋本芳雄執筆)では、手きびしい批判が加えられている。また今上御製を明治天皇御製と記すなど、誤記誤植が相目立つ。

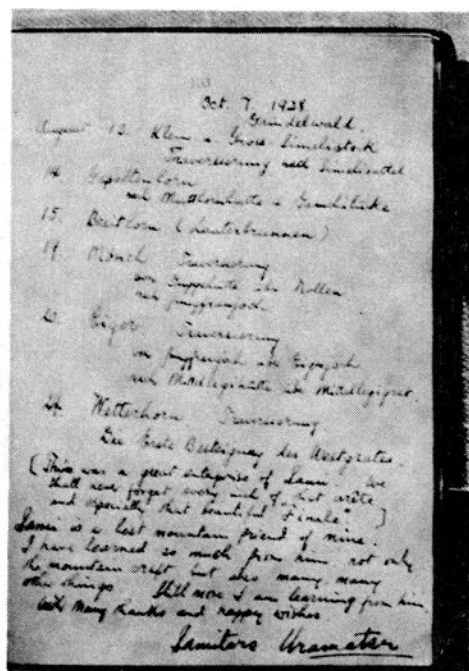
立山縁起中「古いと思われるもの」として相真坊本文を引用しているが、内容的には最も新しいもので、執筆者の見識を疑わせる。このような点が二、三目につくのは遺憾だ。

「近代登山の夜明け」「黒部奥山」の両節は簡単すぎて食い足りないが、これは「立山信仰」章の一部分であるため、おそらく下巻では章を改めて詳述されるのであろう。

「立山信仰」以外の章では「美術工芸」の章で剣岳・大日岳両錫杖(いづれも国の重文)や立山山中・山麓の石仏・石造美術について七〇頁にわたって詳述され、まことに貴重である。「武将たちの足跡」の章では、佐々成政の動静が詳細であるが、佐良佐良越えの項があまりにも簡単で、これはもっと調査詳述してほしかった。

立山曼陀羅三種を始め、立山開祖慈興上人肖像彫刻・立山総図等のカラー写真は実に美麗鮮明で、これだけでも本書の価値は充分ある。なお下巻は目下準備中で五十四年度中には刊行の予定という。富山県中新川郡立山町立山町教育委員会発行 A5判 九二三頁 頒価四〇〇〇円(広瀬誠)

ブラヴァンド氏の山案内手帳(5)



浦松佐美太郎氏の筆跡

日本人としては初めてと思う。この時の山行ですっかり擦り傷のついた山靴をはいたまま、二十三日から始ったヴェッターホルン西尾根の登攀をやった、とエミールは前述の「ヴェッターホルン西尾根初登攀」で書いている。

西尾根は、SAC山案内書によると南西稜となっている。ほぼ一キロに及ぶこの尾根には三つのツルムがあり、かつて難

所には固定ザイルが張られていた。現在は設置されていない。そのためこのルートは大変むずかしく、状態が悪化する手がつけられなくなるとある。この第三ツルム、猫と表現されていた浦松さんも、壁を背にし、エミールを肩にのせ、どうにかバランスをとっていたブラヴァンドのにぎるハーケンが弛み、動いた時には、緊張で半ば顔が硬直してみえたとのことである。

“This was Emil's ten years' dream and it was done. Always he has been my best friend and leader.”

エミールの案内手帳に浦松さんはこう書きこまれた。そしてこの記入が、西尾根に登ったことより以上にエミール・シュトイリにはうれしかったそうである。

このあと浦松さんはエミールと共にドロミテの山々を歩き、そして十月七日ブラヴァンド氏の手帳に、その夏の記録を書きこまれたのである。

九年ヤコブ・アンデルエッグ等が最初に登っている。このルートはビュトラッセンリュッケから北西稜を登る。下りに浦松さん等のとられたガムヒリュッケへの南西稜ルートは、一九一四年ヨゼフ・クヌーベルがヤングと共に最初に登頂路を開いたところ。赤い歯と呼ばれる三つのチンネを持つ難場がある。この山の北東側は最近になって、ローツェ初登頂者E・ライス、AACB会員でただ一人の山案内人W・ムンター、さらにR・アレクサンダーといった若いスイスの精鋭が、一九七三年冬までに三つのルートを開いている。地元の山通にスパルホルンと呼ばれるこの山から南西の山域は、日本人になじみのない山域ゆえ、地元とつながりのない一人旅の日本人にとって、孤独感強い。

八月十九日から二十日にかけて、浦松さんはグイヒヒュッテからミッテルレギヒュッテまで、ノーレンを越えてユングフラウヨッホアイガーヨッホ、ミッテルレギ尾根と經由する長いルートでメンヒ、アイガーに登られている。ミッテルレギ尾根を逆方向から縦走されたのは

●お知らせ

第17回

木暮理太郎翁碑前懇親会

左記により恒例の木暮碑前懇親会を開きます。多数の会員の御参加をお待ち申し上げます。

日時 5月19日(土)・20日(日)
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平

行事 1、19日午後4時より碑前祭

2、同日午後6時より山菜料理による懇親会
3、20日、金峯山またはみずかき山に登る

宿泊 金山平有井館(電話なし)
費用 一泊、懇親会費とも五千円

申込 ルーム事務局
締切 5月11日

定員 40名(先着順)
交通 中央線韮崎駅下車、ラジウム温泉行きバス終点下車徒歩一時間半(タクシーの便あり)

現地責任者 甲府市武田三二六二七
TEL・0552-513175 山村 正光

第三七九回小集会

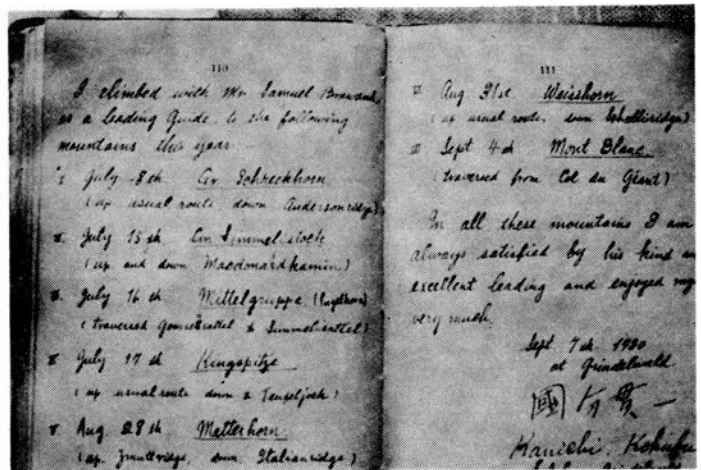
御在所岳藤内壁

御在所岳は三重、滋賀両県にまたがる鈴鹿山脈の一端で、高度は一二〇九・七メートルの低山にすぎないが、広く全国に知られているのは北面の藤内壁と呼ばれる岩壁群のためです。東海地方のクライマーのほとんどはこの岩場でアルピニズムの洗礼を受け、ここで腕をみがきます。今回の現地小集会は岩登りを中心とした山行をおこないます。会員のなかには岩登りの苦手な方、あるいは高令の方もおられますので、そうした方たちにも一般登山路なみの安全性をもったルートを設定しますので、どなたも気軽にご参加ください。

日時 5月19日・20日
場所 御在所岳藤内壁
費用 宿泊費一泊二食三千円
申込 官製ハガキに、住所、氏名と「御在所岳現地小集會に参加希望」と明記のうえ、5月10日までに、名古屋市中区橋一・二七八・千四六〇(株)尾上機械気付日本山岳会東海支部へ。申込みあり次第詳細案内書を送ります。
集合 5月19日午後6時、ブラザーミシン湯の山荘(近鉄四日市駅経由湯ノ山駅下車、温泉方面に徒歩15分、当日は湯ノ山駅より車で送迎)

その他 5月20日藤内壁登攀。山荘には温泉がありますので、お早めにご来。午後4時から受付けます。また中級以上のルートをと

ブラヴァンド氏の山案内手帳(5)



國分貴一氏の筆跡

V Aug. 28 th. Matterhorn
(up Zmuttride, down Italianridge)
VI Aug. 31 st. Weisshorn
(up usual route, down Schallridge)
VII Sept. 4 th. Mont Blanc
(traversed from Col de Géant)
In all these mountains I am always satisfied by his kind and excellent leading and enjoyed myself very much.
Sept. 7 th. 1930
at Grindelwald

Kanichi Kokubu
S.A.C. Grindelwald
Tokio Japan
TOKOKWAI, Keio Alpine Club

△私はサムエル・ブラヴァンド氏を案内人として、この年つぎの山々を登攀した。
I 七月八日 グロース・シュレックホルン
(一般ルートを登り、アンダーソン稜を下る)

II 七月十五日 グロース・ズイメリシュトック(マクドナルド・チムニーの登下)
III 七月十六日 エンゲルホルン・ミッテルグループ(ゲームゼンザッテルからズイメリザッテルへの縦走)
IV 七月十七日 キングシュピッツェ(一般ルートを登り、トイフェルスヨッホへ下る)
V 八月二十八日 マッターホルン(ツムト稜を登り、イタリア稜へ下る)
VI 八月三十一日 ヴァイスホルン(一般ルートを登り、シャリ稜を下る)
VII 九月四日 モン・ブラン(コルド・ド・ジェアンから縦走)

親切で卓越した彼の案内で、私はこれらの山の山でも、いつも満足し、大変たのしかった。

一九三〇年九月七日

ご希望の方は登攀用具をご持参ください。

山菜山行

日時 6月9日(土)〜10日(日)
場所 谷川岳土樽山の家
会費 六〇〇〇円、現地集合
詳細は次号でお知らせします。

会務報告

2月理事会

2月5日午後6時30分

本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(公)、皆川、鈴木、大森(憲)、黒石、越田、田村各理事、片岡監事、浜野、山崎、近藤、小原、中村各評議員

委任 嵯峨野理事、金坂評議員

▽議案

昭和54年度総会日程の件

(高遠)
総会5月11日(金)午後6時より、於私学会館

承認
新選覆刻日本の山岳名著の件

(近藤)
大修館と出版契約

承認

各委員事業計画(案)と予算(案)について (高遠)
各委員会担当理事より説明、次

回理事会に予算(案)作成提出

了承

▽報告事項

・故町田立穂氏より寄贈の図書売却代金で図書室用机とイス購入記念品として名前を入れる

(望月)
・青年懇談会 (橋本)
2月17日、イノシシの肉を喰べる会(西丹沢)

(田村)

高所登山

委員会の活動方針検討

(大森憲)

医療

委員会の活動について検討

(中村)

科学研究



講演会で山岳の科学研究PR図書

(越田)

2月15日、山岳史懇談会

(中川)

集会

1月13日〜15日スキー懇親会、参加者38名

2月6日スキー集会の写真交換会

3月24日オリエンテーション

総会後の山行計画中

6月9日〜10日山菜山行

5月19日〜20日東海支部との共催で御在所岳山行

(鈴木)

海外

今年のUIAA総会は米国

(小倉)

山研

グリーンデルヴァルトにて

國分賞一

S・A・C・グリーンデルヴァルト

日本・東京・登高会

慶応山岳会

ブラヴァンド氏の手帳には、浦松さんが記入した一九二八年から、國分さんの記入した一九三〇年まで、日本人の書き込んだものはない。この間のページは日本人以外の客で埋められているようだった。一九二九年初め、浦松さんはブラヴァンド氏と関係なく冬のフィンステルアールホルンなどにスキーで行かれています。

一九三〇年、國分さんのヨーロッパでの山行は「登高行」第八号に「アルプス紀行」として載っている。七月八日のシュレックホルンは、それまでのようにユングフラウヨッホからアレツチ氷河を経由するコースではなく、辻村伊助氏がとったウンテル・グリーンデルヴァルト氷河からシュヴァルツエグへ出て、そこからシュトラールエグヒュッテ、シュレックホルンというコースを探る。下りはアンダーソン稜を経てシュヴァルツエグヒュッテへとルートをとる。それまでに日本人が降りたことのないルートだった。記録によると標高三七八四メートルの辺からクローワールを下ったとあるが、ネスイヨッホあたりが三七二〇メートルなのではっきりした位置はつかめない。だがシュヴァルツエグからネスイヨッホへのルートとして数本のルートがある。そのうちの一本をとってシュヴァルツエグフィルンへ降り、そこからシュレックホルンクローワールへ入り、ヒュッテまで降りられたものと思う。急なクローワールであるので、落石とかブロックには用心するようSAC案内書には書かれている。また七月十五日のグロス・ズイメリシュトックはマクドナルドチ

ムニーを登下降されているが、これも榎さんや松方さんが採らなかつたやり方で、特にマクドナルドチムニーの登りはママリークラックより短いむずかしいということで、それまでにならぬ新しい経験を積まれたことになる。マッターホルンもツムト稜から登ってイタリア稜へ出るルートは、北東からの一般ルートと違い、それまで松方さんや浦松さんなどの数名の他は選んでいない。

八月三十一日のヴァイスホルンも、雪稜を越えて山頂に達するルートは、ブラヴァンド氏と同行した書上喜太郎氏の他一九二六年、藤木九三氏が登られたくらいで、当時の記録として客観性をもったものがあまりない。従ってシャリ稜を下った國分さんの場合は、矢張りここでも新しい経験を積まれたと言えよう。薄く新雪におおわれたクレヴァスに出会い、仰向きになって体重を分散しブリッジを渡り、じゃぶじゃぶの雪の中を歩き、体中ぐっしょりになってホーリヒトの牧夫小屋へ降りた「アルプス紀行」に書かれている。九月四日のモン・ブランもグラン・ミューレ小屋からではなく、モンタンペールからメール・ド・グラスを登り、ルカン小屋を経てトリノ小屋に泊る。そこからコル・デュ・ミディ、モン・モディのコルと越えモン・ブランに登られている。長いアルパイトを要するコースなので、現在あるこの地域の案内書には、まとめて解説してあるものは少ない。「夕日さすモン・ブランの頂を仰ぎつつ静かに物想う時、再び訪れてあの山々の岩へ手を懸け、永遠に融けざる氷雪を再び斧で打ち砕きながら登る日が一日も早く、再び来ることを望んでやまなかった」と結ばれた國分さんの紀行文から、ヨーロッパアルプスを意欲的に登られたあとの満足感を窺うことができる。(次回は藤島敏男氏ほか)

ブラヴァンド氏の山案内人手帳(5)

山研予算54年は若干アップ
・山日記
54年版は部数減、今後新しいアイデアで検討

ルーム日誌
(54年1月)

11日(木) 理事会
22日(月) 図書委員会
23日(火) 遭難対策委員会
24日(水) 山研委員会
29日(月) 指導委員会
30日(火) 自然保護委員会
今月の来室者三一九名

会員移動(1月)

除籍取消
7273 永井 勝実
7123 吉田 広明

ルーム日誌
(2月)

1日(木) 婦人懇談会
2日(金) 科学研究会 学生部
5日(月) 委員会
6日(火) 三水会 集會委員会
7日(水) 「山岳」編集委員会
8日(木) 図書委員会 婦人懇談会
14日(水) 婦人研究会
15日(木) 山岳懇談会 図書委員会
21日(水) 三水会
26日(月) 自然保護委員会
今月の来室者四三三名

●図書受入報告

図書委員会

昭和53年2月～8月出版社寄贈(前号つづき)

- 千葉重美著「登山ハンドブッカー準備から実践まで」ナツメ社 昭53
- 暁教育図書編「昭和日本史16・スポーツ50年」暁教育図書 昭53
- 山岳写真編集委員会編「別冊山と溪谷 山岳写真1978」山と溪谷社 昭53
- 山と溪谷社編「登山手帖 1978/1979」昭53
- 早乙女綾次著「アルプス素描」銀河書房 昭53
- 早乙女綾次著「山小屋物語一我が山行の回想記一」銀河書房 昭53
- 片岡博著「山菜記」実業之日本社 昭46
- 片岡博著「続 山菜記」実業之日本社 昭52
- 片岡博著「旅の山菜」実業之日本社 昭53
- 青野恭典他編「山・生きている大地」小学館 昭53
- 川崎精雄他著「静かなる山」茗溪堂 昭53
- 小森康行著「登山教室3 岩登り」山と溪谷社 昭53
- 内田良平著「登山教室2・尾根歩きと生活技術」山と溪谷社 昭53

昭和53年11・12月受入和書

- 日本山岳会「山岳・第73年」日本山岳会 昭53
- 武蔵大学日本民俗史演習調査報告I「南佐久宮ノ平の信仰と生活」武蔵大学日本民俗史演習 昭53(和田慎氏寄贈)
- ガストン・レビューファ著 近藤等訳「モンブランからヒマラヤへ」白水社 昭31(別宮貞俊氏寄贈)
- 田部井淳子著「エベレスト・ママさん 山登り半生記」山と溪谷社 昭53(版元寄贈)
- 金久昌業著「北山の峠一京都から若狭へ(上)」ナカニシヤ出版 昭53(版元寄贈)
- ～8. 串田孫一編「忘れえぬ山I」「同II」「同III」旺文社 昭53(版元寄贈)
- 後藤泰治編「ひげの手記・吾妻山遭難の記録」後藤泰治 昭53(後藤泰治氏寄贈)
- エミール・アレ 片桐匡監修「フランススキー術」新潮社 昭30(山崎安治氏寄贈)

第11回山岳図書交流会(53年10月)購入和書

- 石橋力著「山的心象一小さな旅一」洋々社 昭43
- 鉄道省編「日本案内記 東北編」博文館 昭4
- 田山花袋著「温泉めぐり」博文館 昭2
- 群馬県警察本部編「この山にねがいをこめて」二見書房 昭40

- 三上秀吉 羽仁賢良著「山の灯」登山とスキー社 昭17
 - 西沢圭著「信濃紀行集」信濃毎日新聞社 昭16
 - 鈴木朧月編「旅たより」昭和書房 昭9
 - 小島六郎著「遭難」山と溪谷社 昭41
 - 飯塚浩二著「北緯七十九度」三省堂 昭13
 - 中村治四郎編「霧島山」朋文堂 昭18
- 大修館書店寄贈 下記2揃ずつ
*覆刻「日本の山岳名著」全18点22冊及び解題書・特別資料 大修館書店 昭51
*新選覆刻「日本の山岳名著」全20点29冊及び解題書・特別資料 大修館書店 昭53

購入洋書(昭和53年度)

- The Members of the Abinger Himalayan Expedition, 1956, "Mountains and Memsahibs", Constable, London, 1958
- J. A. Bain, "Life and Exploration of Fridtjof Nansen", Walter Scott, 1908
- G. P. Baker, "Mountaineering Memories of the Past", Privately printed, London, 1951
- R. Barker, "The Last Blue Mountain", Chatto & Windus, London, 1959
- F. Benuzzi, "No Picnic on Mount Kenya", William Kimber, Londo, 1952
- C. Bonington:
- "Annapurna South Face", Book Club Associates, London, 1961
- "The Next Horizon", Victor Gollancz, London, 1973
- "Everest, the Hard Way", Hodder & Stoughton, London, 1976
- D. Busk, "The Delectable Mountains", H & S, 1946
- T. G. Brown, "Brenva", J. M. Dent & Sons, London, 1944
- M. B. Byles, "By Coago Boat and Mountain", Seely, Service & Co., London, 1931
- A. P. Coleman, "The Canadian Rockies", Henry Frowde, London, 1912
- J. Disley, "Tackle Climbing This way", Stanley Paul, London, 1959
- W. O. Douglas, "Of Men and Mountain", V. Gollancz, London, 1951
- C. E. Engel, "Mountaineering in the Alps, a historical survey", G. Allen & Unwin, 1971, (new ed.) (つづく)

会員移動(2月)

七〇〇六 代表者変更
第Ⅱ次R・C・C

物故

代表 須田 義信

二七五八 三浦 一郎(54・2・24)

・お知らせ・

* 日本山岳会54年度通常総会は5月11日(金)午後6時より東京市ヶ谷の私学会館でおこなわれます。各位、ご参加ください。

* 上高地山研のオープンは、5月3日の予定です。今年もお誘いあわせのうえ、ご利用ください。

昭和五十四年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎
編集代表 大森久雄

電話東京(03)四四三三
振替口座東京三二四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂